



after

2002年に独立した東ティモールは、17年に初めて他機関の支援を受けず、政府だけで国政選挙を実施する。石田さんは、メディアを利用した選挙情報の伝達や、報道が公正に行われるよう、ジャーナリストなどにトレーニングを行なっている

応募者へのメッセージ

躊躇する理由が星の数ほどあっても、参加する理由は「自分の強い思い」ひとつ。その思いを信じてください。



CASE 5

- before ▶ 大学生 (体育学部)
- after ▶ 国際機関職員 (プログラムアナリスト)

学生時代はバスケットボール一筋、海外とは縁がなく、英語も不得意、TOEICは260点だった石田さん。海外に行くきっかけは「失恋」だったそうだ。海外で知らない言葉や文化に囲まれたことで自身の血が沸くのを感じ、その後は世界を旅するようになった。旅先で貧しくとも夜に街灯の下で勉強している子どもたちを見て、環境は整っているにもかかわらず真剣に勉強してこなかった自分を恥じると同時に、楽しんで学ぶ子どもたちが将来より多くの選択肢が持てるような国づくりの仕事に興味を持つようになる。通学中の電車で青年海外協力隊の中吊り広告を見て「これが天職だ」と思い、就職活動をせずに協力隊に応募。卒業後すぐに協力隊に参加した。石田さんは、ガーナでバスケットボールを教えることでスポーツを通じた青少年育成に取り組んだ。自身がそだったように、選手にバスケットを通じて努力をすることやチームワークを大切にすることを養ってもらいたいと指導をした。その熱心な指導により、チームはガーナ北部大会で優勝。活動を通じて国際協力の可能性を感じた一方、結果が形に残らないスポーツが開発途上国でどのような役割を果たすのか疑問も持った。

before

いしだゆういち
石田裕一さん
青年海外協力隊経験者
(ガーナ・バスケットボール・
2005年度派遣)

UNDP東ティモール
事務所 職員

before

1982年 大分県生まれ。
2005年 3月、国土館大学体育学部体育学科卒業。

JICA Volunteer

2005年 11月、協力隊に参加。ガーナでバスケットボールを通じた青少年への教育・競技推進に務める。

after

2007年 11月、帰国。
2008年 4月、石油天然ガスの資材を扱う外資系専門商社にて勤務。
2011年 8月、英国イーストアングリア大学大学院入学。12年11月に修士号を取得。
2013年 1月、国際ボランティアとして国連開発計画 (UNDP) 東ティモール事務所がパナナス部勤務。
2015年 5月、プログラムアナリストとしてUNDP東ティモール事務所がパナナス部勤務。

after

帰国後、国際協力の仕事につくことも考えたが、基本的な仕事のスキルがまずは必要と考え、就職3年勤務した後、再び海外での挑戦を決めた。協力隊活動の意味を知るため、貯金をはたき、英国の大学院で「教育開発」を研究して修士号を取得。また、国際機関に絞って就職活動も行い、「JOCV枠UNV制度」を利用し、国連開発計画 (UNDP) の東ティモール事務所採用された。その後、同事務所の正職員となり、現在はパナナス部で選挙事業の広報を担当している。仕事では「怒らず、悩まず、焦らず」。それらは協力隊で得た姿勢だ。「自分の思惑通りに進まなくても、それに耐え、どう解決するかを考えることや同僚との信頼関係構築が重要なのは協力隊と同じ。とびっきりのスマイルであいさつして、現地語を駆使してジョークを言う。相手の心をつかむ

秘訣も協力隊で学びました

東ティモールは2002年に独立した新しい国。石田さんは映像などを通して選挙情報を伝えるなかで、国民が選挙を通じて新しい政府に期待していることを肌で感じるといふ。人々の熱い思いを映像で伝えていく仕事。この仕事で世界に貢献していきたいと石田さんは考えている。



JICA Volunteer

バスケットボールの試合中、選手にアドバイスをする石田さん